

日本語のみによる授業

木 村 宗 男

語研日本語教室で作成し、使用している日本語教科書は、初級の第1課からローマ字をいっさい使わず、漢字まじりかな書きである。初級と中級第1部までは、付属の単語表に英語と中国語の訳語が与えてあるが、訳文は与えない。授業中も教科書の訳をしないばかりか、母国語その他の外国語を、全くと言っていいほど使わないで、日本語のみによって教えている。これは語研だけのことではない。組織的な集中教育を行なっている国内の主な日本語教育機関は、日本語のみによる授業を行なっているところがほとんどである。国外の大学その他でも、日本から派遣された日本語教育の専門家に要求されるのは、日本語のみによる授業である。日本における外国語教育の *native speaker* に対応するわけである。そのような方法によらない、翻訳を主とする教育を受けてきた外国人学生の学力が、他のものに比べて劣ることは、毎年の日本語入学試験の結果を見ても明らかである。

外国語教育を行なうのに、学習者の母国語についての知識を持つことが有利であることは言うまでもない。ことに、教材作成の段階では、外国語と母国語の比較対照に基づいて、材料を選択し配列しなければならない。しかし、そのことが教室で母国語ないし仲介語を使うことを正当化するものではない。

日本語を日本語のみ使って教える教授法の文献としては、山口喜一郎の「日本語教授法原論」(1943)がある。山口喜一郎は日清戦争直後の台湾を

振り出しに、当時の朝鮮・関東州・華北と移りながら、異民族に日本語を教えることに終始した人である。その足跡の示すとおりの長い豊富な体験に基づいて、日本語教授法を体系的に著述したのが上掲の書である。イエスベルセン、パイイ、オグデンとリチャーズなどの言語理論が取り入れられ、また、パーマー、グアン、ベルリッツなどの教授法に対する批判もあるこの書は、日本語教授法上の貴重な著作ではあり、教えられるところが少なくないが、われわれが行なっている日本語のみによる教授法の理論的根拠としては、わたしはむしろ英語教育のハロルド・E・パーマーの教授法理論を取りたい。

母国語ないし仲介語を使わないで授業をする場合に、文の意味を教えるには、つぎのような方法による。

1. 文の表現している内容を説明する。
2. 同型の例文を与えて意味を類推させる。
3. 文を既習の語句、文型で言いかえる。
4. 視覚・聴覚に訴えて事実を再現し、理解させる。

以上の方法は単独に、または適宜に配合して行なわれる。翻訳に比べて遠回りの方法のようであるが、そのあいだに、学生の理解力が養われ、文型も会得される。そして、何よりも大切なことは、このような意味の与え方が、そのまま日本語のみによる実地的な指導を可能とする表現の練習へとつながることである。母国語使用の授業では、実地的な効果のある練習は行なえないと言っていい。文型練習の効果も、このような日本語のみによる授業において、はじめて発揮されるのである。

これに対して、教室で学生の母国語を使って文意を教え、練習をさせることは、一見早道であり、文意を明確にし、練習の効率を高めるかのごとくであるが、つねに訳に頼らなければ理解も表現もできない習性を学生に与えてしまう。しかも、そのような対応的な翻訳が可能なのは初級のはじめのみで、やがて、訳文のみでは処理できない日本文の段階に達したと

き、学生は学習を放棄してしまうのである。このような教師と学生によって、日本語教材の不備、日本語教育の未発達、日本語の難渋さが不当に喧伝されるのではないか。

パーマーの言う language as code は母国語でも教えられるが、language as speech は母国によっては教えることができない。language as code と language as speech はソシュールの langue と parole にそれぞれ相当する。

授業に母国語・仲介語を使用しないとすると、教師たるものはまず教材そのものをよく分析し、導入・練習の手順を考え、利用すべき視覚的・聴覚的教具を工夫しなければならない。そのためには、言語学・音声学・国語学・教授法・視聴覚教育法について勉強しておかなければならない。

(語研教授)